

特集／記録史料の保存と保護

修復現場からみる史料保存

金山 正子

歴史を身近に感じさせられるヨーロッパの街並み。重苦しさと同時に、自分たちの祖先の営みを目にせずにはすませられない。そういった環境のなかで生活する住民たちの歴史観を想像してみる。そこには国民性の違いというような言葉だけではすませられない何かがあるのではないだろうか。

昨年11月末から20日間ほど欧州の修復現場に実際にふれる機会に恵まれ、まず漠然と感じたことは、時間の流れの違いと実質的に工

夫を凝らすゆとりの有無の違いである。

古いものを遺すということに対する関心は、それを受け入れるとか反発するとかを含めてあるのだと思う。遺すという前提の上で如何に新しいものを取り入れていくかを考えるのと、古いものは取り去ってしまって新しいものを完全なかたちで取り入れてしまうのと、どちらが安易で簡単なことかは言うまでもない。しかし、自分たちがいまそこに存在するという形跡を残すことは、人間として自然の

欲求ではないだろうか。それが少なくなってきた日本は、なにかが消えつつあるということだろうか。

しかし、どういう選択をするにしてもそれは人が決めることであり、やはり人間の問題ぬきにして保存は考えられない。人を育てるということは、おそらく技術をたたきこむということではなく、選べる人間、判断できる人間を創りだしていくことなのだと思う。いろいろあるものの中から最善とおもわれるものをセレクトしてゆける人間を育てる、そして人を育てることにかかる時間的なゆとりがヨーロッパでは感じられた。

折りよく今回の訪問では、デンマークの修復保存技術学院での革製本の修復実技の授業を見学させてもらった。学生たちは、慎重にサンプルの革製本の解体・修復をすすめてゆく。皆それぞれ進み具合も出来具合も様々だが、講師の女性是一人一人に対して相談のりつつアドバイスをしてゆく。ちょうどその日の午後は、学年末実習用に修復する本を王立アカデミー附属図書館へ探しにゆくということで、「何なんだろう」と思いつつ同行させてもらった。

図書館の一室には、所狭しと書棚に天井まで並べられた1800年代の革装丁の本がずらりとあり、その中から学生たちは思い思いの本を手に取りじっくりと検討する。自分が修復するに値する本を値踏みしているかのようだ。ある学生は修復しがいがないと言って手にした本を書棚にもどす。またある学生は内容がおもしろくないと言って、これまた元にもどしてしまう。その本選びにその日の午後いっぱいを使い、講師が二人それに付き添いで相談にのっている。この面倒見もさることながら、驚いたことには、この学生たちの学年末実習用に修復する本を王立アカデミー附属図書館が貴重な蔵書の中から提供しているということだった（もちろん修復後は図書館へ返納される）。午前中の実習風景を見学していた私は、他人事ながら、原書の修復を彼らにまかせてしまって大丈夫なのだろうかと思わず

心配してしまう。しかし、こういう国や公共機関の包容力が、次の世代をゆっくりと、しかし着実に育ててゆくのかもしれない。日本ではとてもこうはさせてもらえないだろうなあ、と多少皮肉な感想を持ちつつこの情景を眺めていた。

また、他に訪れた数カ所の修復工房で非常に卒直に感じたことは、彼らは工夫するのだなあということである。そして自ら考え創りだした自分の方法に自信を持っている。でなければ、あんなに嬉しそうに自分の仕事を語れない。リーフキャストにしろペーパースプリットにしろ、別にそれが新しい技術というのではなく長い歴史があり、その中で改良を重ねられてきたものだ。日本では何事に限らず完成されたものが要求されがちで、作り上げられたものを取り入れてすませようとしてしまうように思う。しかし、それでは時代の流れに対応しうる改善は望まれない。

さて、私個人として興味があったのは、今の修復の技術をしかるべく保ってきた指導的立場の修復家たちはさておき、彼らの次の世代の若者たちがどのような所で、どのように、何を考えて毎日努力しているのかということだった。残念ながら言葉の未熟のためにほとんど何も聞き合えなかったのだが、それぞれの場所に勉強している学生たち、そしてその学生たちを指導したり、自ら工房で作業したりしている若者たちが存在する。常に自分達の意見を言い合える人間が近くに存在するということが、自らの志を高めるには必要なことなのではないだろうか。修復だけでなく文書館をとりまく層を広げるためにも、日本でもそういった養成機関、そしてその人材の受け入れ機関が早く実現してゆけばと願う。

欧州での研修を終え、まだまだ日本は大変な状況なんだなと思いつつ修復現場に帰り、あらためて、ものに手を加えることの意味を考えると、人間の手が加わればそのものは手を加える以前のものとは全く同じものではありえない。けれども、それは人

間の手によらなくとも自然の環境や時間の流れにしても、物質を変化させていくということに関しては同じである。問題なのは、何のために、どういう要素を尊重しつつ、どのように手を加えるのかを決めることが人間の場合にはできるし、その選択をしなくてはならないということだ。

元の姿をできるだけ復元する、あるいは見た目の美しさを保つ、などもひとつの選択ではあると思うが、数年来歴史史料の収集・整理の現場に携わってきた自分としては、歴史史料の場合、何より一般の閲覧者（もちろん50年100年先までも）が実物をじかに手にとって見られるための保存であるべきだと考えている。

公文書館から修復の現場に移って約1年を経て、毎日毎日作業に追われつつも、修理する文書群に着手し始めるとき、また一群の修理を終えてその仕上がりを見なおすとき、いつも思うのは、この史料たちはこれからどういう扱いを受けてゆくものなのだろう、果たしてこの修復の方法は適切なものなのだろうか、ということである。

文書をどういう形に生まれ変わらせるかは、実際に手を加える我々が全てを決めるのではなく、本来、文書館の担当者たちとの共同協議がもっと必要であるということ、いつも強く実感する。残念ながら現在の状況では、修理の対象となる史料群の処置詳細に至るまで相互の意見交換のできる体制をもつ文書館はそうは多くはないように思える。しかし、どういう修復の処置をするかは、たとえばリーフキャストという技法ひとつをとってみても多様の、また未知数の用途を含んでおり、その使い方如何は、結果的にどういうものを期待するかが前提としてあつた

えて検討されてゆくべきものだと思う。「ものは使しよう」と言うがまさにそれで、考えることなしに使うのは横着というものである。

繰り返しになるが、文書を修理するとき、その文書にとって最善の処置をしたいと考えている。そして、どれが最善の処置であるかは、文書の外観だけで判断すべきものではない。その文書を含む史料群の歴史的意義、そしてその文書の今後の保管・利用などを考慮した文書館側の担当者の意向が大きく関与すべきものである。文書館から史料を引き取ってくる時、そして生まれ変わった史料を無事送り届けるとき、またその間のプロセスを通して、互いのコミュニケーションをもっと実質的に深めてゆく責任を感じているし、それは文書館で史料を扱う人たちにも同様に考えていってほしい問題である。

史料保存に関わる人たち（文書館の人間、修復の現場、そして様々な機会に関係する諸機関）を取り巻く世界がこれから如何様にも変わっていくものであることは、まだまだ日の浅い私でも感じていることである。気楽な立場だけに言わせてもらうならば、もちろん欧米から学ぶべき技術や思想・理論は今の日本の現状では多々あると思うが、日本が古来から欧米にはない独自の文化を歩んできたように、やはり日本独自の保存理念といったものを確立させていかなければおもしろくない。それには何より、それを実現させていく、より多くの人間が必要とされることであり、やはり人の大切さを今の社会に訴えると同時に、いずれ史料保存の次の一幕を担うべきOur generationの奮起を、自分自身に叱咤するとともに期待したいと思っている。

かなやま まさこ・東京修復保存センター